

東京バッハ合唱団 月報

[第 685 号] 2019 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 685

July 2019

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

グラーマンのコラール「主を頌めまつれ み名 わが内に」 が歌われる 2 つのカンタータ、第 28 番と第 167 番

大村 恵美子 (主宰者)

今年後半では、偶然にも 2 つの演奏機会に、同じ旋律のコラール (譜例) を歌うことになりました。バッハが好んで用いたヨーハン・グラーマン (1487-1541) の「主を頌めまつれ み名 わが内に」“Nun lob, mein Seel, den Herren”の第 1 節と第 5 節です。



① BWV 28/2……コラール第 1 節〈主を頌めまつれ み名 わが内に〉、カンタータ第 28 番《頌むべきかな 年終り》BWV 28 より第 2 曲モテット風合唱。11 月 4 日、日本エキュメニカル協会主催「講演と音楽の集い」(東京カテドラル聖マリア大聖堂)にて客演。

② BWV 167/5……コラール第 5 節〈父・み子・み霊を頌め讃えまつらん〉、カンタータ第 167 番《主の愛を讃えよ なれら》の第 5 曲コラール合唱。12 月 14 日、東京バッハ合唱団主催「クリスマス教会コンサート」(2 部公演: 荻窪教会、三崎町教会)。

歌詞作者グラーマンは、宗教改革時代のドイツの牧師・神学者・教師でルター派の指導者。ポリアンダーの筆名でも知られます。このコラールは 1530 年ごろに、当時流布していた旋律にのせて、全 4 節からなる作品として作詞され、1540 年に他のコラールと共に出版されました。その後、第 5 節 (②) が付加されます。旋律は、16 世紀の民謡「私は小さな青い花を知っている」(Weiß mir ein Blümlein blaue) を原曲としています。ケーニヒスベルク宮廷トランペット奏者で作曲家のハンス・クーゲルマン (1495-1542) の手によって中間部に 8 小節が付加され、上記の教会歌に編曲されました。

このコラール作者グラーマン、後にはなんと、ライプツィヒ聖トーマス教会付属学校の校長(レクトール)に就任しますから、同じ学校の合唱長(カントール)バッハにとっては、2 世紀をさかのぼる大先輩に当たります。そんな親しみもあってか、バッハは第 28 番、第 167 番のカンタータ以外にも多くの作品に、このコラールを組み込みました(第 17 番、29 番、51 番、モテット BWV 225、など)。

この旋律と冒頭 4 小節(譜例)を共有するものに、パウ・エーバーの「こぞりて主を頌め」“Herr Gott, dich

loben alle wir”があり、バッハがコラール・カンタータ第 130 番の骨格として用いました。こちらは、ルイ・ブルジョワの編曲でカルヴァン派「ジュネーヴ詩編歌」中に収載され、日本キリスト教団『讃美歌』(1982 年)の礼拝・讃美の項 No. 4、No. 5 と、頌栄 No. 539 にも入って(「あめつち こぞりて」など)広く定着しましたが、原旋律「小さな青い花」にまでは遡るのですが、グラーマンのコラールとは別系統と見られます。

さて、その歌が、偶然にも 11 月と 12 月の異なった演奏機会に、それぞれ 12 行のたっぷりとしたコラール詩節として登場します。①では、声・楽器一体となって動くしみじみとした心持ちを表わすモテット様式の年末用合唱曲として、また②では、16 分音符の飛びかう華やかなオーケストラに、ソプラノがコラール旋律、他 3 声部が緻密な和声を施す、「洗礼者ヨハネの祝日」にふさわしい、明るく力強い祝賀ムードの合唱曲として、それぞれの完熟度を競うような作曲です。

バッハが、カンタータ作曲の際に、単純な 4 声体コラールを曲の最終におくという定番に限ることなく、冒頭・中間・最終のどこにでも、自由自在においてその才能を発揮した好例が、今年のこの 2 曲で、よく納得できるのです。

歌詞のもととなった旧約聖書「詩編」103 は、かなり長いものですが、それをグラーマンがコラール全 5 節にまとめたものです。参考までに、その歌詞の第 1 節と第 5 節を、ここに並置しておきます(大村恵美子訳詞)。

①BWV 28/2 (第 1 節)

主を 頌めまつれ
み名 わが内に!
豊かなる 恵み
心に とどめよ!
なが罪 赦し
病い いやし
いのちを 救い
いだきたもう
慰め あたえ
驚のごとく
君は 民 護り
あらたに 生かしむ

②BWV 167/5 (第 5 節)

父・み子・み霊を
頌め讃えまつらん!
約せし み恵み
いや増したもう 主を
主に 依り頼み
委ねまつる
われらが 心も
身も 魂も
ことごと わが主に
今ぞ 歌わん
アーメン かくあれかし
とこしなえに

特別演奏会@荻窪教会

団員の斉唱と合唱による、定演曲目からの抜粋

5月の第118回定期演奏会（18日、府中の森芸術劇場ウィーンホール）終了から1週間後の、5月25日、同じ曲目の抜粋版を、荻窪教会でもご披露しました。

本番公演の直後とあって、合唱はさらに熟成されたハーモニーをお届けできたのではないかと思います。各声部に1曲ずつ割り当てられた独唱歌は……。オーボエにリードされた器楽アンサンブルの助けを得て、団員一同、大いに楽しませていただきました。聴衆のみなさんの反応はいかがでしたでしょうか？

本番にひきつづき、この日のご来場者がお寄せくださったアンケートから、ご紹介させていただきます。

■演奏全般について、ご意見をお聞かせください：

- ・とても良かったです。ソロの方がいらっしやらない合唱は、どのようになるのかしら……とっておりましたが、先週のコンサート〔第118回定期演奏会、府中の森〕とはまた違って、合唱団の方々だけの合唱もまた、とても良かったです。
- ・趣味でチェロを習いはじめ、現在アマチュアオーケストラで弾いています。でも元々はこういう曲が弾きたかったのです。気軽に聞きに来られて、大変うれしかったです。
- ・オルガンの演奏がとても良かったです。
- ・SとBのアリア二重唱の高い声と低い声のハーモニーが良かったです。
- ・バッハを奏でる喜びが伝わります！
- ・久しぶりのコンサートでした。感動しました。ハーモニーが澄んで美しい。
- ・備え付けのポジティブオルガンの音色が素晴らしい！カンタータ第188番のシンフォニアの演奏が良かった。ポピュラーな曲で聴きなれているので……。
- ・先週の府中に伺えず、こちらへ参りましたが、教会のコンサートも素敵でした。
- ・すばらしい演奏でした。声がきれいです。男性が大勢いらしていいですね。楽器の方々もとても良かったです。
- ・大げさでない、シンプルな感じがよかったです。
- ・全体的にすばらしいと思います。
- ・抜粋版ではあるが、特に不自然さを感じずに楽しむことができた。最後に太鼓の演奏者紹介があって良かった。どこで演奏しているのか不思議だった。
- ・先週の本番に伺うことができなかったため、今日聴けて幸いでした。抜粋でも満足です。

■とくに、日本語演奏について：

- ・わかりやすかったです。
- ・初めは違和感もあるかと想像していましたが、違和

終了報告

東京バッハ合唱団 特別演奏会@荻窪教会
“悩みのさなかにも 堅き望み”

日時：5月25日（土）、15：00開演

会場：日本キリスト教団・荻窪教会

曲目：

・カンタータ第109番《われは信ず わが主よ》

1. 合唱：われは信ず わが主よ 援けたまえ
5. アリア（A）：主は知りたもう
6. コラール：主を望み たよれば

・カンタータ第166番《いずこへ 主よ 行きたもう》

1. アリア（B）：いずこへ 主よ 行きたもう
3. コラール（S）：主に願いもとむ
6. コラール：わが終り 来たるや

・カンタータ第188番《わが堅き望み》

1. シンフォニア
2. アリア（T）：わが堅き望み まことなる神にあり
5. レチタティーヴォ（S）：世の力 失せゆく
6. コラール：いとしき主に われは頼らん

・カンタータ第79番《神は わが光 盾》

1. 合唱：神は わが光 盾
3. コラール：感謝せん 神に
5. アリア二重唱（S/B）：神よ 見捨てたまわざれ
6. コラール：われらに まことを

みんなで歌いましょう

・コラール〈感謝せん 神に〉(BWV79/3)

・コラール〈われらに まことを〉(BWV79/6)

演奏：

Ob 土屋愛菜、Vn 中川典子、VC 岡山ひかり

Org 田尻明葉、太鼓 (BWV 79)・室田真由

合唱と斉唱・東京バッハ合唱団、指揮・大村恵美子

参会者：82名

(内、来聴者46名、演奏者6名、合唱団員30名)

感はありませんでした（というか、まず器楽の音を聞いてしまう）。長い音が響いているときは、ドイツ語だろうが日本語だろうが、何言ってるかよく分かりません。日本語が聞きとれると、ふつうに讃美歌を聞いている感じです。でも長い音が多く、練習をよくなさっているの、教会の礼拝できく讃美歌より美しく聞こえます。讃美歌を合唱曲にした感じです。いつかこういう曲を弾きたいと思いました。

- ・久しぶりでバッハを聴いた。
- ・よく聴きとれました。
- ・日本語訳、演奏は分かり易いし、親しみが持てる。
- ・違和感なく、自然に受け入れることができたし、わかりやすい日本語で、直接胸に響く思いがした。
- ・先生のわかりやすい日本語が大好きです。“み言葉よ輝け 明るく”というメッセージ、心に残りました。
- ・日本語で歌われるのは賛成です。訳すことで言葉が減りますが、意味がわかりますので。原語もステキなので、両方いいですね。
- ・意味が分かってよかったです。
- ・曲の内容を理解するうえで、多くの人に有効であると思う。

■その他、本日の運営全般、会場等について何でも：

- ・5/11、たまたま荻窪教会の前をとおりかかったら、練習（器楽との合わせ）の音が通りに聞こえたので、練習風景をのぞいたら、この日のチラシを手渡され、きょう参加しました。
- ・並び方も良かったと思います。
- ・大村先生はじめ、皆さまの力強いお声、合唱と演奏、おはたらきに感服いたします。ありがとうございました。真由ちゃんの太鼓、2階のギャラリーからだったので、お顔が見られて嬉しかったです。
- ・教会はお尻が痛くなるのが難点です。美しい教会ですが、合唱、難しいけど楽しかったです。
- ・椅子の座面が固くて……。皆で歌うときは、せめて各声部の始めの音を出してからに。
- ・運営はスムーズでよかったです。道に迷いました。
- ・フロアーとの合唱が楽しかった。
- ・とても清潔感と明るさの溢れる教会で、気持ちよく聴けた。
- ・教会で開かれることに意義深さがあると、改めて感じた。
- ・今後のご案内よろしく!!



■写真上：オーボエは土屋さん。下：カンタータ第 188 番シンフォニア。Org 田尻さん、VC 岡山さん、Vn 中川さん。いずれもリハーサル風景[撮影・千葉光雄(団員)]

訳詞に関する意見交換

～ 訳詞作業の理解を深めるために～

<編集部>

外国語の歌を訳して歌うときの、最大の困難は、日本語に訳した際の音節の数が、原語歌詞の音節数を圧倒的に超えてしまうことでしょうか。明治以来、訳詞を試みた多くの先達が、大いに苦心したことでした。なかには対応する語彙をすべて活かそうとするあまり、1音節に複数音を詰め込んだり、元来の音符を分割するなど、音楽に手を加えることまでが為されました。

バッハを日本語で歌うこの合唱団の訳詞演奏では、オリジナルの文意を十分に保ちつつ、原詞で歌ったときの音楽的な流れにも可能な限り忠実に対応するようにと、心がけられます。結果として、相当数のことばが原語の語彙の中からふるい落とされ、時に大胆な意識をほどこさねばなりません。言うまでもなく、翻訳者の解釈の領域に属する事柄で、1曲のカンタータ全体の主意に重きをおいたうえでの部分の単語の取捨選択、または当該のカンタータ作品をこえて、作曲者バッハの信仰や思想、さらには時代精神やキリスト教の神学的な背景に立ち戻っての“ことば”の置き換えが要請される場合もあります。

当合唱団の練習現場でも、興味深い「実例」に遭遇しました。訳詞作業の困難さや奥深さに心を留めていただく一助になればと、関与された方々のご承諾をいただいた上で、書簡を公開させていただきました。

小海 基 様

(森永 毅彦様宛てに写し)

大村 恵美子

このところ、訳詞のことで、幾つか訂正するかどうか問題になりました。

1) 聖書の語が引用されている処は、なるべくそのまま用いるか、そうすると聖書を読んだことのない人には全く通じないことがあるので、意識するほうがよいのか？

2) 主語を変えずに訳すと、誰がどの相手に、とはっきりさせねばならず、私としては、日本語では「私が、あなたに」と指定するところを、「一される」と、自己の立場で受け身の形であらわすことを多用します。でないと、とても歌うときのシラブルが足りないからです。そうすると、主語がないし、逆になっているので、間違っているのではないかと考えられることがあります。

1) は、これまでも、ソリストや団員らから〈つまづき〉〈あがない〉などは、キリスト教に無縁のひとびとには意味不明だからと、他の語に替えるように言われたことが度々ありました。でも、これは、聖書を読めば、状況から自然に出てきたり、三位一体説によれば必ず使われる語だったりして、一般人のキリスト教知らずのほうに合わせるだけというもの、おかしいことです。

2) について。

その日の練習からの帰宅後、大村健二と以下のような話をしました。——森永毅彦さんから、BWV166 第3曲コラール中の歌詞〈ながもとを出でて〉(下掲の対訳参照、第6行目)は、原語 bis daß die Seel aus ihrem Nest 中の代名詞 ihrem が、名詞 die Seel (自分の「魂」)を指していて、ihrem Nest は「汝の」巣ではなく「自分の魂の」巣ということで、文法的に無理があるのではないか、というご指摘をいただいている、とのこと。だから、たとえば〈わが魂 巣立ちて〉などとしては、というのが健二の意見。

<p>3. Choral S Ich bitte dich, Herr Jesu Christ, Halt mich bei den Gedanken Und laß mich ja zu keiner Frist Von dieser Meinung wanken, Sondern dabei verharren fest, <u>Bis daß die Seel aus ihrem Nest</u> Wird in den Himmel kommen. リングヴァルト(1582)第3節</p>	<p>3. コラール(S) 主に 願い もとむ われを 導き 逸(そ)らしめたもうな、 なが 思いより。 堅く 立たしめよ、 <u>ながもとを出でて</u> 天に 至るまで (大村恵美子訳詞)</p>
---	--

私も、ドイツ語通の森永さんから勧められたのなら、と、すぐ団員のみなさんにも練習中に訂正してもらいましたが、ゆっくり考えてから、後に、健二にこういう風に話しました。

——自分が育った巣からはなれて、天国に向かって進んでゆく in den Himmel kommen (第7行目)ように、主イエス・キリストよ、われ願い求む ich bitte, Herr Jesu Christ (第1行目)と、最初に、イエスに呼びかけている。これは、三位一体説に基づいて、自分の身近(地上)に寄りそっておられるイエスが、天の神(父)の国でわたしが全き存在として場を得られるように、わき道に逸(そ)れないように、見守ってください——と、ねがい求めているわけです。私は、人間というものは、身体がリアルな自分、魂は(自分の魂といっても)、メタ=フィジカル、つまり神に属する領域だと信じるので、地から天へ、といっても、地にある魂は、自分のものでありながら、かつ、父・子・聖霊の三位一体の子に属しているのだから、〈自分の巣〉という語の意味合いにはなじまない。したがって、私の訳が誤りとは思えない。私の体内に認められる魂は、イエスの存在そのもので、その導きを得て、天なる父の国をみざすのだから——。

こんな話し合いをしました。そうなると、文法上では齟齬があっても、die Seel aus ihrem Nest は〈ながもとを出でて〉がふさわしく、〈わが魂 巣立ちて〉その他に変えなくても……と思えるのです。

「じゃあ、次回みんなに説明して、元通りに戻してもらおうか?」と、なりそうなのですが、ドイツ語理解とキリスト教理解、この両方を備えておいでになる小海様のご意見を伺ってみよう、というのが、私たち2人のいまの気持ちです。ご厄介でしょうが、どうぞよろしく。(2019年7月2日)

大村 恵美子 先生

森永 毅彦 (団員)

お手紙(正確には、小海氏宛て書簡の写し)ありがとうございました。

拝読して、先生のお考えがよくわかりました。結論を先に申し上げるならば、先生の本来の訳文に戻すことにまったく異論ありません。

当初疑問を覚えたときの私の思考の回路を思い起こしてみますと、おおよそ次のようなものでした。BWV166の第3曲(コラール)は、「du(なれ)=主イエス・キリスト」への呼びかけで始まる。「du」という人称代名詞のこの用法は、このコラールを最後まで支配すると考えられる。したがって、末尾の一節を〈ながもとを出でて 天に至るまで〉と訳すと、これは「イエスのもとを出て、天に至る」という意味になってしまう、これはオカシイのではないか。まずこう考えたわけです。もしここで立ち止まって熟考していたならば、その段階で自分の浅慮に気付いたかもしれません。しかし、私は“立ち止まる”のではなく、単純にドイツ語原文の検討に移行しました。

問題の箇所は、「ゼーレ [Seele=魂。音節を減ずるために、ここの原文歌詞では Seel] は、その(=ゼーレの)巣から出て、天へ至る」となっています。これは「イエスのもとを出て、天に至る」とは距離があるように思いました。杉山好訳を参照してみたところ、「わが魂は巣立ちて天に到るをうべし」となっています。ドイツ語の用法では、<Seele>はきわめて個人的な意味合いを有するのが通例であり(この点で <Geist>とは対照的な言葉です)、杉山も「ゼーレ」を明確に「わが魂」ととらえています。そしてわが魂が巣立つのは「わが魂の巣」からであると解せられます。「イエスのもとを出て、天に至る」に感じた私の違和感は、間違いではないことが確かめられたように思いました。私の貧弱なる思考はここまででした。そこで、先日、この疑問をお伝えしたのです。

お手紙を熟読して、〈ながもとを出でて 天に至る〉という言葉に先生がこめられる意味を教えられました。そして、あらためて私の解釈力のいたらなさを思い知りました。もちろん、私も30年以上にわたって先生の訳業に学んで来ましたが、バッハの歌詞の訳出作業の何たるかについて、少しはわきまえるようになっていると自認するところなしとはしません。(その視点から見たとき、先生が練習場で提示された改訂歌詞[事実としては、大村健二の試訳:編集部]〈わがたま 巣立ちて〉は、まことに落ち着きがわるく、コレデハイケナイ、と思ったことでした。)しかし、繰り返し申し上げますが、先生の本来の訳文の意味は、今回のお手紙を読んでではじめて教えられました。[以下略]

(2019年7月4日)

<了>